

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12478

研究課題名(和文) モンゴル高原地域における生業生産物の商品化に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative study on commercialization of subsistence products in the Mongolian Plateau

研究代表者

尾崎 孝宏 (OZAKI, TAKAHIRO)

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：00315392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、「脱生業化により牧畜社会がグローバルな市場経済に組み込まれた現状において、牧畜社会の生業性と産業性はどこで均衡しうるのか？」であり、当初計画では研究代表者・研究分担者および内モンゴルに拠点を有する研究協力者の計3名が2019～2021年度の3年間で実施し、脱生業化に伴って商品化が進んでいる生業生産物のうち食、住を対象として、内モンゴルとモンゴル国の比較研究を実施する予定であった。だがCOVID-19パンデミックの影響を受け、研究の主力を文献研究を通じた、モンゴル国および内モンゴルにおける過去100年程度の生業と産業の均衡点の変動プロセスの復元に絞った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、途中COVID-19パンデミックに現地調査を阻まれて1年の延長を余儀なくされたものの、逆にパンデミックという社会的災害を経て牧畜社会の生業性と産業性の均衡点が移動する様子を記録することに成功した。また、社会主義時代など過去の資料の分析を通じ、脱生業化以前にも生業性と産業性の均衡点が存在してきたことを明らかにできた点に学術的意義がある。本研究の社会的意義としては、歴史的に均衡点が存在したことが牧畜社会の持続可能性をもたらしてきたことを示し、さらに乾燥地域の環境に適応した牧畜が今後も継続するために不可欠な実証的データを提供することで、現地社会の持続性や安定性に寄与する点が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The research question of this research project is "where is equilibrium point between subsistence and industry in Mongolian pastoral societies, under the current situation that pastoral societies are involved in global market economy through their de-subsistence process?". In original plan, our team including the PI and 2 co-researcher would carry out 3 years long comparative study about diet and living which were chosen as examples of commercialized subsistence products through de-subsistence process in Inner and Outer Mongolia. However, as COVID-19 pandemic prevented us from carrying out field research, we focused our research on analysis of clarification on historical changing process of equilibrium point between subsistence and industry in Inner and Outer Mongolia in recent 100 years.

研究分野：内陸アジア地域研究

キーワード：モンゴル 牧畜 生業 市場経済

## 1. 研究開始当初の背景

おおむね 2000 年以降の現象として、牧畜社会における脱生業化と呼ばれる現象が全世界的な規模で進行している。従来、牧畜は生業つまり自給性の高い食糧確保手段として研究がなされてきた。しかし 21 世紀に入り、経済のグローバル化が進行する中で、通信手段や交通手段といったインフラ面を中心に世界各地で大規模な資本投下が実施され、牧畜社会もその例外ではなかった。家畜の移動性を活用する牧畜社会において、通信・交通インフラの整備はそれ自体歓迎すべき現象であったが、それを活用するためには携帯電話や自動車の購入が必要であり、その結果現金収入の重要性が以前と比較して飛躍的に増大した。

こうした状況への牧畜社会側の対応は、主として生業的に消費されてきた家畜及び畜産物の商品化であり、生業生産物の商品化を通じたグローバル経済への対応プロセスを研究代表者らは牧畜社会における脱生業化と呼んでいる。

脱生業化という概念は、産業化とは以下のような点で異なる。第一に、従来の産業化概念は生業と産業の二項対立が前提となる概念であり、両者の中間形が安定的に存在することは想定されていない。だが後述するように、本研究課題が対象とするモンゴル高原地域においては産業的な生産と伝統的な生業生産物の生産・消費は長期間併存しており、現在においてもその均衡点に変化しているだけである。つまり現状の変化は牧畜社会の新たな生存の様態として、生業と産業を両端とする直線上での産業方面への移動と考える。

第二に、現状の脱生業化で観察される現象は、従来の商品生産の強化だけではない。本研究課題が対象とするモンゴル高原地域においては、そうした商品は肉、毛皮、カシミア、牛乳などである。しかし近年、従来は自家消費品目であった乳製品、ゲルやそのパーツとしてのフェルト、畜糞などが、観光を代表とする消費の文脈の多様化やインターネット通販を代表とする流通手段の利便化の影響を受けて商品化されるなど、品目の増加が観察される。

興味深い点は、生業生産物が産業化によって放棄されるのではなく、生業生産物の生産を継続しつつ一部が商品となって売られる点であり、さらに商品化が牧畜民に生業生産物の生産を継続させる動機となっている点である。ここから導かれる本研究課題の核心をなす学術的「問い」は、「脱生業化により牧畜社会がグローバルな市場経済に組み込まれた現状において、牧畜社会の生業性と産業性はどこで均衡しうるのか？」である。

## 2. 研究の目的

本研究課題は上述した学術的「問い」の答えを得るべく、モンゴル高原地域において文化人類学的な手法を用いて実証的なデータを収集・分析することを目的とする。

モンゴル高原地域では 17 世紀以降、主として中国社会との家畜・毛皮等の交易を通じて広域的な流通網に組み込まれてきた。さらに 20 世紀以降、社会主義化など国家からの大きな介入を受けており、牧畜を生業と産業の中間に均衡させることに成功してきたという意味で先進的な地域である。また近年の動向を見ても、モンゴル国では 1990 年代に社会主義崩壊の影響で生業寄りに牧畜をシフトさせるなど常に変動が続いており、さらにモンゴル高原全体に関して、2000 年以降の経済のグローバル化に伴う資本投下の影響により、より一層の脱生業化が進行していることが確認されている。

分析の方向性としては、生業生産物の商品化をめぐる牧畜民の自律性の反映や、牧畜民の文化保持としての機能に注目し、商品化を活用しつつ生業生産物がいかに存続し、生業と産業の均衡点を何処に求めようとしているのかを明らかにしたい。

本研究課題は、モンゴル高原地域という生業と産業の均衡点の模索に関連する歴史的先進地域を対象とし、生業生産物の商品化に関しては対象品目の増加を伴う今日的な牧畜の脱生業化を、生業と産業の均衡点の変動という観点から位置づけようとする点に学術的独創性が認められる。また創造性に関しては、他地域との比較研究におけるベンチマークを提供できるという学術的文脈に止まらない。後述するモンゴル国における国際学会での分科会発表や内モンゴルにおける国際シンポジウムにより、参加したモンゴル人研究者を通じてモンゴル高原の有する脱生業化における先進性の認識強化のみならず、牧畜民の当事者間では情報の秘匿が少なからず存在する状況を鑑みれば生業生産物の商品化への知識の普及促進も見込まれ、結果的に牧畜の継続を希求するモンゴル牧畜民のエンパワーメントを達成しようという意味で、社会的文脈における創造性も有している。

## 3. 研究の方法

本研究課題においてはモンゴル高原地域における脱生業化に伴って商品化が進んでいる生業

生産物のうち、食および住の側面を対象として研究を実施する。というのも、衣に関しては 20 世紀前半の段階ですでに自給性が低く、現在に至るまで同様の傾向が継続するため、研究対象として除外する方が適当であると判断したためである。

手法的には文化人類学的な現地調査・分析手法を採用し、モンゴル高原地域内における内モンゴルとモンゴル国との比較を行う。これら両地域には、生業生産物の商品化をめぐる類似と相違が見出しうるためである。両者の類似と相違をもたらす要因は、自然環境のマクロ的な類似、グローバルなインフラ整備の前提としての市場経済化という共通項の存在、および政治的な制度的条件の相違、そして両者のコミュニケーションの回路としての牧畜労働者などを通じた越境・交流の存在を想定し、比較の軸とする、

具体的な研究対象は、上述した食、住の側面のうち、食品としては NCM ( Non Cow Milk )、特に生業的な利用の低下とともに頭数が激減した畜種である馬とラクダの乳を利用した乳製品、居住用品としては後述するように現状として商品化が進行しているゲルおよび畜糞を想定している。

#### 4 . 研究成果

本研究は当初、令和元年から 3 年間の計画であったが、世界的な COVID-19 パンデミックの影響により、1 年間延長して 4 年間で研究を実施した。

##### 令和元年度

令和元年度は、分担者( 風戸 ) のスケジュール上の都合より、代表者( 尾崎 ) と分担者( 風戸 ) の研究打ち合わせと代表者( 尾崎 ) と協力者( 包 ) の研究打ち合わせを別個に行い、作業分担等を明確にした。

代表者( 尾崎 ) と協力者( 包 ) は、内モンゴル中部およびモンゴル国南部で現地調査を実施し、主としてラクダに特化した乾燥地域の牧畜民を対象に、彼らの乳製品の商品化、畜糞の利用、内モンゴルとモンゴル国との間の牧畜労働者の越境・交流について観察及び聞き取りを行った。

また、代表者( 尾崎 ) は内モンゴルの馬乳酒生産の歴史的変遷に着目し、文献資料および現地調査資料を用いた分析を行い、1930 年代から現在までの約 90 年間のタイムスパンにおいて、生業と産業の均衡点の変動プロセスを分析した。

分担者( 風戸 ) は、モンゴル国中部で現地調査を実施し、旧正月期間における儀礼食・歓待食を中心に、生業性と産業性の側面から現地調査を実施した。

一方、代表者( 尾崎 ) ・分担者( 風戸 ) ・協力者( 包 ) の 3 名で 2020 年 3 月に内モンゴルで実施予定だった生業生産物の中食化に関する現地調査は、パンデミックの影響で来年度へと延期を余儀なくされた。

##### 令和 2 年度

令和 2 年度の調査計画は、前年度末に実行できなかった内モンゴルでの現地調査、5 月の日本モンゴル学会における分科会発表、令和 2 年に予定していたモンゴル国での現地調査、および文研研究を通じた過去 100 年程度のタイムスパンにおける、生業と産業の均衡点の変動プロセスの復元であった。

しかし、前年度より継続したパンデミックのため、現地調査はすべて延期せざるを得ない状況となり、また 5 月の日本モンゴル学会は中止となった。そのため、本年度の研究の主力を文献研究を通じた、モンゴル国および内モンゴルにおける過去 100 年程度の生業と産業の均衡点の変動プロセスの復元に絞り、また成果発表も個人が執筆する論文発表もしくはオンラインでの発表が認められている学会での個人発表へと変更した。

まず、研究打ち合わせは内モンゴル在住の研究協力者を含め、すべてオンライン会議アプリケーションを利用した遠隔方式に切り替え、5 月、9 月、1 月に行った。研究代表者および研究分担者は主として自身の過去の調査データを利用した再分析に依拠し、『文化人類学』誌上で「《特集》文化と身体の変遷点としての食」を企画し、12 月に合計 4 本の論文を掲載した特集として掲載された。

また研究代表者は内モンゴルにおける 1930 ~ 40 年代の調査データおよび各種地図データ( 帝国陸軍作成の外邦図など ) の分析を通じ先行研究の調査地点を特定し、自身の調査データと対照して数地域における変動プロセスの復元を行った。その結果の一端は 2021 年 3 月の IUAES2020 Online Congress における口頭発表「History of Japanese anthropological Mongolian studies from the beginning of 20th century」に盛り込まれた。

##### 令和 3 年度

前年度に引き続きパンデミックが継続したため、研究代表者・分担者による現地調査が遂行できなかっただけでなく、現地研究者である研究協力者に現地調査の代行を依頼することも実質的に困難であった。辛うじて、モンゴル国に在住するインターネットが利用可能な既知の調査世帯に対して、Zoom などの遠隔会議システムを利用して彼らの牧畜戦略の現状や変化をインタビ

ューすることができた。その成果は「中国＝モンゴル関係のメタファーとしてのコロナ」として発表したが、特殊状況への対応事例であるため、これがポストコロナ状況へ引き続く恒久的な変化と理解すべきか、あるいは一時的な対応であるかは今後の評価が必要である。

現地調査による最新データの収集が困難であったため、既存データの見直しに基づく英語での研究発表(“ Comparison of pastoralists’ pastoral strategies in the Mongolian Plateau”)や論文公開(“ Introduction: environmental disaster in Mongolian modern history”)を積極的に実施した。特に前者については、移動を伴わずに国際学会に参加できる昨今の状況を利用しており、パンデミック状況の逆利用であるといえる。

また内モンゴルでの現地調査は、パンデミックとは別に政治的事情により困難が継続することが予想されるため、1930年代から50年代にかけての過去の調査データについて詳細な位置情報を付与し、過去から現状への変化プロセスを明らかにする作業に着手した。特に内モンゴルでは地名データの変更が顕著であるため、古地名のリストを作成するため旧日本軍作成の外報図や旧ソ連作成の地形図を収集し、分析を行った。

#### 令和4年度

本年度は最終年度として研究成果発表に注力し、研究代表者は『沙漠研究』誌上に2本の論文が掲載され(うち1本は2023年6月に出版予定)、研究分担者はJournal of Contemporary East Asia Studies誌上に論文が掲載された。また本年夏以降、モンゴル国に関してはCOVID-19パンデミック後の牧畜社会の現状について現地調査が可能になったことから、研究代表者及び研究分担者は現地調査を再開した。

研究代表者はモンゴル国北部の郊外型草原(都市部に近い草原)で現地調査を実施し、調査速報として2023年2月に行われた国際会議The 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conferenceにおいて口頭発表Post COVID-19 pastoral society as a resilience from social disasterを実施した。また研究期間内には刊行できなかったが、研究代表者及び研究分担者は本年度の現地調査の成果として、パンデミック後の均衡点の変化の可能性について論文化する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Takahiro OZAKI	4. 巻 32-S
2. 論文標題 Comparison of pastoralists' pastoral strategies in the Mongolian Plateau	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Arid Land Studies	6. 最初と最後の頁 295-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14976/jals.32.S_295	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 尾崎 孝宏	4. 巻 33-1
2. 論文標題 遊牧実践に付与された諸条件 モンゴル 近現代におけるインフラの影響を例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 沙漠研究	6. 最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14976/jals.33.1_139	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Ozaki Takahiro, Takakura Hiroki	4. 巻 11
2. 論文標題 Introduction: environmental disaster in Mongolian modern history	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Contemporary East Asia Studies	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/24761028.2021.2015837	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 尾崎 孝宏、風戸 真理	4. 巻 85
2. 論文標題 序	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 453-463
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.85.3_453	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 尾崎 孝宏	4. 巻 85
2. 論文標題 エスニックツーリズムと民族料理	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 505-523
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.85.3_505	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 風戸 真理	4. 巻 85
2. 論文標題 モンゴル国における飲食と身体的コミュニケーション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 524-544
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14890/jjcanth.85.3_524	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 尾崎孝宏	4. 巻 平成30年度号
2. 論文標題 中国内モンゴルにおける馬乳酒製造法の変化に関する比較民族誌的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 公益財団法人 たばこ総合研究センター 研究報告書	6. 最初と最後の頁 123-144
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 風戸真理	4. 巻 25
2. 論文標題 観光みやげものの地域性と脱地域性 モンゴル国のフェルト製品の事例より	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生態人類学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 OZAKI Takahiro
2. 発表標題 Post COVID-19 pastoral society as a resilience from social disaster
3. 学会等名 6th Oxford Interdisciplinary Desert Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 OZAKI Takahiro
2. 発表標題 Comparison of pastoralists' pastoral strategies in the Mongolian Plateau
3. 学会等名 The DT XIV International Conference on Arid Land (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 風戸真理
2. 発表標題 格子と波のあいだとしてSNSをしてみる YouTubeとFacebookにおける規格性と身体性
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 OZAKI Takahiro
2. 発表標題 History of Japanese anthropological Mongolian studies from the beginning of 20th century
3. 学会等名 IUAES2020 Congress (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 尾崎孝宏
2. 発表標題 内モンゴルにおけるラクダの商品化にみられるモンゴル国南部地域との関係性
3. 学会等名 日本現代中国学会2020年度西日本部会研究集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 尾崎孝宏
2. 発表標題 エスニックツーリズムと民族料理 中国内モンゴル自治区中部の事例より
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾崎孝宏
2. 発表標題 内モンゴル自治区シリングル盟における外国人牧畜労働者の浸透
3. 学会等名 日本現代中国学会2019年度西日本部会研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 OZAKI, Takahiro
2. 発表標題 Natural disaster as a cause of change in Mongolian pastoralists' strategy
3. 学会等名 International Altay Communities Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 風戸真理
2. 発表標題 食文化にみる標準性・地域性・身体性：モンゴル国の食事と饗応より
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAZATO, Mari
2. 発表標題 Pastoralists' animal handling culture reflected on social media: Depiction of Livestock and pets by Mongolians on Facebook
3. 学会等名 International Altay Communities Symposium (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAZATO, Mari
2. 発表標題 Everyday Eating Behavior and Notions of Mongolian Pastoralists
3. 学会等名 International Conference on Food Studies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 川島真、池内恵、小泉悠、今井宏平、伊豆山真理、本名純、舛方周一郎、平野克己、尾崎孝宏、田中周、倉田徹、福田円、早川理恵子、宮本悟、宇山智彦、上英明	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 192
3. 書名 UP plus 新興国から見るアフターコロナの時代	

1. 著者名 野林厚志、宇田川妙子、河合洋尚、濱田信吾、飯田卓、宇田宗平、梅崎昌裕、大澤由実、櫻永真佐夫、菅瀬晶子、中嶋康博、尾崎孝宏ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 716
3. 書名 世界の食文化百科事典	

1. 著者名 小松久男、風戸真理ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 816
3. 書名 中央ユーラシア文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	風戸 真理  (KAZATO MARI)  (90452292)	北星学園大学短期大学部・短期大学部・准教授   (40118)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	包 海岩  (Bao Haiyan)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	呼和浩特民族学院			
中国	内蒙古科技大学			